

第3節 サブカルチャー教材による授業開発に向けて—学習者の興味・関心の喚起を目指すために

1 国語科授業における問題点

国語科の授業は読解が主流である。教室で教材の文章を読んで、その内容について教師が説明を加えて理解させる。読んで、説明して、分からせて、暗記させるという形態の授業である。教師からの一方的なメッセージ伝達が授業全体の大きな流れとなる。学習者は、専ら教師からのメッセージを受信することに終始する。このような授業は多くは一斉授業という形態である。すべての学習者が黒板に向き合って座るといった教室の空間的な配置が、この授業形態を支えている。

その一方で、国語科におけるメディア・リテラシーの授業が話題になっている。ことばという媒体のみに限定されていた教材は、映像や音声メディアにまで領域を広げて、多様な形態の授業が展開されるようになった。コンピュータの飛躍的な進展に伴って、データベースやパワーポイントを用いたり、オンデマンド形態による授業が展開されたりと、国語教育も新しい授業のパラダイムを取り入れつつある。

「読んで、説明して、分からせて、暗記させる」という伝統的な形態の授業と、オンデマンド授業のような新しい授業形態とが同居する現在、学習者の実態を的確に把握したうえで、どのような形態の授業を展開するのかを模索しなければならない。科学的な方法に基づく有効な授業研究が求められることになる。

特に小説のような文学的文章の学習指導が、一つの岐路に立たされている。授業において教師の発問に対する学習者の反応はきわめて鈍い。特に学年が進む身につれて、彼らの反応は会務となる。たとえば小説の主題を考えるという類いの発問には、彼らはほとんど反応しない。指名されてもただ黙して下を向いたままである。何かを答えたとしても、発表する声が小さくて、離れた席のクラスメートまでは届かない。教室全体が「待ち」の姿勢になっている。

やむなく教師が解説を始めると、学習者は揃って反応する。何かを板書すると、決まって板書されたことをそのままノートに写す。赤い色のチョークで板書に傍線を引くと、ほとんどの学習者が赤い筆記用具で同じようにノートに傍線を引く。教師が、小説の主題を考えることは重要なことだなどと話そうものなら、彼らは即座に「試験に出る」というマークを付けることになる。ノートにはチェックペンで赤い線がいくつも引かれ、定期試験が近くなるころにはグリーンチェックシートを巧みに使用した「暗記」の学習が開始される。

学習者は教師から一方的にメッセージが届くという形態の「垂直型」の国語の授業¹に、すっかり慣れてしまったかのようなのである。ただし、彼らはこのような授業を決して歓迎しているわけではない。主体的な興味・関心を抱いて授業に向き合うことはない。「何故国語を勉強するのか」と問うと、即座に「試験があるから」「成績が出されるから」という回答が戻ってくる。すなわち、上級学校への進学という実利的な目的意識のために、彼らはひたすら授業に耐えているわけである。このような国語教室が活気に乏しいのは、もはや当

然のことと言うほかはない。

教科書の教材を読んで、説明して、分からせて、暗記させる、という授業の形態は、暗記させた結果を定期試験で問うという場所へと帰結する。定期試験の前になると、学校周辺のコピー業者に学習者の列ができるというのは皮肉な光景である。試験のための試験勉強は、さらに上級学校の入学試験に対応するための受験勉強へと発展する。高校受験、大学受験という制度が、中学と高校の授業内容を大きく規定しているという事実も決して無視はできない。国語の授業は読解が多いという現実も、一つに入学試験の出題傾向が読解を主流にしていることと無縁ではない。入試制度の改善と同時に、評価の問題に対しても、根本的な見直しをすることが急務である。

国語の教師は一般的に文学が好きである。教室で文学を語りたくて望んでいる教師は多い。そのような教師が、学習者を文学の面白さに開眼させることができれば効果があるわけだが、教室はなかなか思うように盛り上がらない。教師の一方的な文学談義で授業が成立することはない。改めて学習者が楽しく取り組めて、なおかつ国語の学力がつくような授業を模索してみたいところである。そのためには、「工夫」の域を超えた「戦略（ストラテジー）」が必要になる。

国語教室を伝統的に支配し続ける「垂直型」の授業は、学習者から主体的な学習意欲を奪うことになりかねない。彼らは自分自身で読んだり考えたりするよりも、まず教師の解説に耳を傾けようとする。そこでまず求められるのは、「垂直型」授業を「水平型」授業へとパラダイム転換することである。

ここでわたくしが「水平型」授業と称するのは、教師から学習者へという一方のメッセージの伝達だけではなく、学習者相互に、そして学習者から教師に向けて、さらに教材と学習者との間にもメッセージのやり取りがあるという授業を意味している。「垂直型」においては、教師はまさしく「教壇」という学習者よりも高い場所にあって、あたかも水が高い場所から低い場所へと流れるように、教師から学習者へのメッセージの伝達が授業の主流を占めている。それに対して「水平型」では、メッセージの伝達は教師と学習者と教材の間でインタラクティブ（双方向）に行われる。このような授業形態において、教師は情報の発信者というよりは、むしろ様々な学習者からの情報を整理するコーディネーターとしての役割を担うことになる。

教室には40人前後の学習者がいる。この「教室」という「場所」の特性にも留意しなければならない。言うまでもなく、教室にいる学習者は実に多様で、一人ひとりが独自の個性を持っている。ところが「垂直型」の一斉授業では、教師はこの40人に一律に同じメッセージを送り続ける。それを受け止める学習者の状況は一人ひとりが異なるはずなのに、彼らにはその差異を確認する余裕も意欲も見られない。

佐藤学は「教室のディレンマ」という論文²において、教室という場所の本質を次のように指摘する。

教室は、何かを教えたり学んだりして何事かを達成したり何かの価値を実現する場所として考えられているが、その過程で同時に、数々のディレンマに遭遇して対処を迫られ、いくつもの妥協を余儀なくされる場所でもある。

佐藤は論文の中で、この「教室のディレンマ」を除去し抑制しようとする方向ではなく、ディレンマを生成している文脈を再構成すること、すなわちそれを生かす方向を提案して

いる。わたくしは佐藤のいう「教室のディレンマ」を生かす方向として、「水平型」の授業を位置付けたいと思う。すなわち、教室には40人もの学習者が集い、そこには自ずと彼らの「文化」が立ち現れる。この「教室の文化」とも称すべき現象を生かす方向を、授業の中で実現する必要がある。

文学作品を読むことの授業を例に取るなら、教室にはまさしく40人それぞれの40通りの読み方が存在する。それらの読み方を交流させる場所を授業の中に設定したい。そこで彼らは同じ立場にある他のメンバーの読み方を聞いて、自身の読み方と比較することができる。メンバーの読み方に共感もすれば、反発もする。特に自分自身の読み方が見えてこないような場合は、他の読み方は大いに啓発を与えてくれることだろう。そこに、「読みの交流」を通じた「読みの深化」が実現することになる。

教室の構成員は、それぞれが独自の内面を有する学習者である。そこに生成する「教室の文化」を有効に活用するような授業を実現したい。そのためには、教師から発信されるメッセージを唯一絶対的な結論として受け入れるという受動的な「垂直型」の授業を越境して、インタラクティブなメッセージのやり取りを目指す「水平型」の授業が必要になる。

「水平型」授業の中心となるコンセプトは、この「インタラクティブ（双方向）」という要素にほかならない³。インタラクティブなメッセージの交流を実現するとき、学習者は主体的に授業に参加しているという意識を抱くことができる。そこから、学習に対する意欲も生まれてくる。

「水平型」の授業は、一斉授業という形態にとらわれることはない。個々の学習者における学習とクラス単位の学習との中間に、グループレベルの学習を位置付ける。すなわち、4人から5人程度のグループを編成して、そのグループ単位の学習を展開する場면을積極的に確保することになる。このような形態によって学習者が授業に参加しているという意識は高まり、学習意欲を喚起することができる。

2 国語教育でいま何が問われているのか

2007年現在実施されている学習指導要領は、2002年度年度から小・中学校で一斉に実施され、高等学校では2003年度から学年進行で実施されたものである。この学習指導要領では実施の当初から、完全学校5日制の実施に伴う授業時間の減少という問題が浮上した。「ゆとり」という趣旨のもとで進められた教育改革の大きな課題として、「学力低下」という問題が取り上げられるようになった。大学生が小数や分数の基礎的な計算ができないという事例報告を初めとして、学力低下を立証する多くの事実が明らかにされ、話題になった。また「教育2002年問題」という用語⁴が教育産業では格好の宣伝文句となって、学校教育で育成することが困難になった学力を学習塾が保障する戦略に出たという事実もある。教育現場では、必修となった「総合的な学習の時間」の扱いとともに、この学力低下という問題に向き合わなければならなくなった。それと同時に、各教科の教育で育成すべき学力とは何かという基本的な問題を検証する必要性が生じた。国語教育は言語の教育としての側面を明らかにしながらも、国語科で育成する学力とは何かという問題を改めて吟味しなければならなくなった。特に「知識・技能」を中心とした「学んだ力」としての学力だけではなく、「興味・関心、意欲・態度」を中心とした「学ぶ力」としての

学力に注目する必要がある。

その一方で、現代社会の高度情報化はますます進展して、コンピュータを中心とする情報機器が急激に普及したため、学校教育とコンピュータとの関わりについても検討を急ぐ必要がある。新しい学習指導要領において「情報科」という教科が新設されたことによって、高等学校の現場では教員免許の問題などの具体的な対応に追われた。そのような状況下において、学力論議とともにメディア・リテラシーに関する論議も活発に行われるようになった。

幼児のころから高度情報機器に囲まれた学習者は、活字を媒体とした在来のスタイルとは異なって、音声や映像を媒体とした情報に囲まれて育つという環境が整っている。かつて心理学者の福島章が「イメージ世代」と命名した⁵子どもたちは成長し拡散して、インターネットを含むさらに多様な「イメージ」の中で育つ世代として、新たにわたしたちの前に立ち現れつつある。それは、イメージ・リテラシーの教育の必要性が問われる深刻な事態でもある。

国語教育は文字通り「ことばの教育」であり、国語教育で本来育成すべき学力は、ことばを話したり聞いたりする能力、書く能力、および読む能力ということになる。国語科ではことばによって発信された情報を聞いたり読んだりして、その内容を適切に理解し、かつ的確に表現するという学力が求められるわけだが、高度情報化時代の到来は、情報の媒体をことばのみに限定して考えることを許さない。ことばに加えてイラストなどの図版を含む映像や音声を通して伝えられる多様な情報を、いかに速く、正確に受信かつ発信するかという能力が問われることになる。

ことばとともに映像や音声を通して伝えられる夥しい量の情報を受容したうえで、その内容を取捨選択して、本当に必要な情報を選択する能力、すなわち情報整理および情報処理のための学力が必要になった。それは前節で言及したように、OECDのPISA調査の結果から読解力低下が極めて大きく取り上げられ、「PISA型読解力」が話題になったことと、深く関わってくる問題であった。「読むこと」や「聞くこと」の領域の中に、ことばとともに映像や音声を読んだり聞いたりする活動を組み込むことを検討しつつ、新しい高度情報化の時代に対応するための学力の在り方を問い直さなければならない。さらに「書くこと」の領域の中にも、文字に加えて絵や図を書くという活動を組み込む工夫も必要である。加えて、そのような図版を含む文章を、今度は分かりやすく説明するというプレゼンテーションの能力も必要となる。今後国語科の学力について吟味する際には、以上のような能力を含むメディア・リテラシーの問題を検討しなければならない。そこで続いて、サブカルチャー教材を通して育成可能な国語科学力の問題に目を向けてみたい。

3 サブカルチャー教材で育成する「言語化能力」

パーソナルコンピュータと携帯電話の普及により、映像がますます日常生活の中の身近な場所に浸透しつつある。パソコンや携帯電話のディスプレイを通して、常におびただしい量の映像情報が送信される今日、文字よりも映像が優位の社会環境の中で育った学習者を前にして、国語教育の在り方を大きく見直す必要も生じてきた。一方で、様々なメディアから際限もなく送り続けられる情報を的確に整理して、批判的に受け止めかつ取り入れ

る能力としてのメディア・リテラシーに関わる授業が、教育の現場でも実践されるようになりつつある。本研究では、学習者が強い関心を寄せる多様なサブカルチャーを教材化して、教育現場での授業構想に関する提案を試みることにする。

その教材の教材としての価値を検討する際に、教材を通して育成できる国語科学力の問題を避けて通ることはできない。そこで国語教育でサブカルチャー教材をどのように扱うかを検討する際に、まずは授業において育成する学力について明らかにする必要がある。そこで注目したいのは、浜本純逸が言及した「言語化能力」である。

『国語科教育論』（溪水社、1996. 8）において浜本は、ソシュールの「ランゲージュ」が言語活動ではなくそれを可能にする能力だとする丸山圭三郎の考え方を確認したうえで、この用語に「言語化能力」という訳語を充当した。浜本はこの「言語化能力」を、「言語文化」「言語生活」「言語体系」の基盤にあってそれらを生み出し運用する人間固有の潜在的な能力であるとして、次のように述べている。

これからの国語科教育は、言語体系・言語生活・言語文化を生み出していく根底にある言語化能力に働きかけ、その能力を活性化し、より強化化していくことを目標とすべきであるということになる。⁶

同書において浜本は、その目標を達成するためには、「言葉の生まれる場所に学習者を立たせ、言語化能力を目ざめさせ、豊かにしていくこと」が必要であるとして、「絵画・写真・テレビ・ビデオなどの映像を言葉化する表現活動をさせること」を提案した。

この指摘を受けて、映像を教材化する際に、「言語化能力」の育成という目標を授業の中心に位置付けることを考えてみたい。映像から発信されるイメージやメッセージを、ことばによって理解しかつ表現するという活動を通して、「言語化能力」の育成を図ることが、授業の目標となる。

浜本はまた「言葉が生まれる場を設ける」⁷において、以下のように指摘した。

言葉という形式を、想を拘束するものではなく、想をより豊かにより伸びやかに展開するものとして、身につけ使えるようになりたい。／想を生み出し言葉にする力を育てるには、「言葉が生まれる場を設ける」ことが必要である。

この「言葉が生まれる場」を設定することによって、「言語化能力」の育成を目指すことができる。サブカルチャー教材を用いた授業を構想する際に、いかにことばが生まれる場を設けるか、という課題はきわめて重要である。

学習者を取り巻く様々な映像を教材化して、国語教育の現場に導入する試みは多い。ただし国語科の授業として成立させることは、決して容易なことではない。浜本純逸の言う「言語化能力」のより詳細な分析を含めた研究が求められる。そして本研究においては、サブカルチャー教材によって育成される国語科の主要な学力として、「言語化能力」を位置付けることにする。

4 興味・関心喚起の方略を探る

国語教育において最も重視しなければならないのは、国語に対する学習者の興味・関心および学習意欲を喚起することである。すべてはそこから出発する。学ぶという行為は本来楽しい行為であるはずなのに、学校で強制的に押し付けられる教科内容は苦痛以

外の何者でもない。その点を克服しない限り、効果的な国語教育を展開することは困難である。興味・関心・意欲は学びの根源にあるもので、授業を通してそれらを喚起することをまず工夫する必要がある。本研究では、これらを「学びへと向かう意志」として把握したうえで、その意志を育てることを主要なテーマとして、具体的な方策を考えることにしたい。

具体例として、続けて表現指導特に作文指導の場合について考える。表現に向かう興味・関心および学習意欲喚起のためには、特に次のような点への配慮が必要である。

- ① 書くことの効果的な教材を発掘すること。
- ② 学習者を円滑に書くことへといざなうための課題を工夫すること。
- ③ 書くことの具体的な場所を設定すること。
- ④ 個人・グループ・クラスの各レベルにおいて学習を展開し、「教室の文化」を生かした効果的な評価を実施すること。

まず配慮すべき点は、学習者の書くことへと向かう意志を育成できるような力のある教材を発掘することである。表現意欲を喚起するために、子どもたちの「いま、ここ」を大胆に取り込んだ教材開発を目指したい。その中には、サブカルチャーに属する素材が多数含まれている。すなわち、多くの学習者が関心を寄せる漫画、アニメーション、音楽、映像、テレビゲーム、携帯電話などのメディアを積極的に取り入れて、国語科の教材として成立するぎりぎりの境界線上に位置付けてきた。教育的見地から常に批判の対象となるテレビゲームのような素材も、意図的に教材化してみる。テレビゲームの中に内在する、子どもたちの心を引き付ける力に注目するからである。ただし自明のことではあるが、テレビゲーム自体を教材とするわけではない。表現意欲を喚起するための装置として、位置付けることになる。

続いて、学習者を自然に書くことの活動へといざなうことが大切である。そのためには学習課題を工夫しなければならない。彼らが意欲を持って取り組むことができるような作文の学習課題を開発することは、授業の出発点である。学習者の関心に即した、また難易度も彼らのレベルにふさわしい課題を提供することによって、円滑な学習への導入が実現できる。

授業の内外で、必ず「書く」という具体的な活動の場面を設定することも重要である。学習課題を通して実際に書く場所を設定することは、作文指導の基本と言えよう。文章表現力は表現するという活動によって育成される。その実際の活動の中から、さらに新たな表現意欲が生まれてくる。書く活動自体の面白さを発見し、学習者が主体的に書くという課題に取り組むように仕向けることこそ、作文指導の戦略にほかならない。

学習者が個人で書いた作文は、グループおよびクラス単位の検証を経て、再度個人へとフィードバックしたうえで、よりふさわしい表現に向けての視野を開くようにしたい。グループ学習を積極的に取り入れて、個人、グループ、そしてクラスの各段階での学習が成立し、それらが相互に交流することによって、学習の効果を挙げるができる。

パソコンと携帯電話によって、メールという表現および通信の手段が普及している。子どもたちにとって携帯電話は、通話よりもメール機能の方に重点が置かれるようになっていく。彼らが意欲的にメールの送受信を繰り返すという事実に向けて、表現へと向かう意志の存在を確認しておきたい。そこには、情報のインタラクティブ性という特性が浮

上する。すなわち情報を一方的に送信するのではなく、相手からの返信を期待するという意志を見ることができる。このような双方向の交信を可能にするという要素をメールの特性として把握し、それを教室での作文教育に取り入れることをも工夫してみたい⁸。相手を想定して書くこと、そして相手の反応に即して書くことは、今日のメールにおけるコミュニケーションにつながる。学習者の生活する「いま、ここ」の文脈の中から適切な状況を取り上げて、学習のテーマとする。そのテーマをめぐって異なる学年の間でのインタラクティブなメッセージの交流を実現することによって、学習者の書くことへ向かう意志は活性化する。

まず学習者の日常から作文へと向かう姿勢を育成し、国語科の授業時には常に「書くこと」の場所を自然な形で設けることによって、無理なく書くことへと向かわせるようにする。そして作文の授業では、彼らのいる「いま、ここ」と学校とを隔てる境界を越境して、書くという活動へといざなう。そのために、興味・関心を十分に喚起し得る教材を用意する。そして彼らが抵抗なく、書く活動へと展開することができるように、取り組みやすい学習課題を提示する。授業中もしくは授業時間外にでも、実際に書くという活動を取り入れるというのは当然のことである。かくして書かれた作文は、グループレベルで相互評価を実施し、クラス全体においても内容と表現の両面について吟味する場を設けることにする。そして最終的には個人へとフィードバックして、表現をいろいろと磨くことができる。教室には異なる個性を有する多くの学習者が集まっている。そこにはおのずと独自の「文化」が生成される。わたくしはそれを「教室の文化」と称していることは先に触れた。この「教室の文化」を生かした評価を実施することも、作文の授業構想に含めておきたい。

子どもたちは本来、書くことが好きはずである。もしも学校で作文教育を受けることが、彼らから書くことの楽しみを奪ってしまうとしたら、それはまさに本末転倒というべきであろう。彼らが自らの生きる現実の中で少しずつはぐくんできた書くことへと向かう意志を学校では大切に、より広く大きな表現意欲を育てる必要がある。

いま作文指導を具体例として取り上げてみたが、国語科の授業に対する学習者の興味・関心喚起のための方略を探るためには、広く現代社会のエンターテインメントに視野を広げる必要がある。たとえばテレビ番組、CM、テーマパークなどがどのような政略でエンターテインメントを提供しているのかを調べることは、授業開発のために様々なヒントを与えてくれる。しんどうこうすけの『エンタメの法則』（インデックス・コミュニケーションズ、2007. 9）には、30に及ぶ「エンタメの法則」が紹介されている。ちなみに第一の公式は「起承転結の『起』が重要→あとはどうにかなる」というものだが、それはそのまま授業における「導入」の話題として考えることができる。現代社会の様々な事象に目を向けつつ、魅力溢れる授業を開発してみたい。本研究では、以下の章においてサブカルチャー教材を用いた授業の実際を紹介する。

注

¹ 教師から学習者へ、上から下へ、教壇の上から下へ、という上下の縦の関係を象徴する意味合いから「垂直型」という用語を使用した。これに対して、学習者相互の横の関係を象徴する意味から、「垂直型」と対照的な概念を表す用語として「水平型」を用いた。

² 佐藤学編『教室という場所』（国土社、1995. 1）所収。

-
- 3 この点に関しては、第2章第1節で改めて言及する。
 - 4 『月刊国語教育』（2002. 3）の特集テーマは「新国語科で学力は一『二〇〇二年問題』を考える」であった。「2002年問題」という用語が当時用いられていたことが分かる。
 - 5 福島章『イメージ世代の心を読む』（新曜社、1991. 12）。
 - 6 『国語科教育論』（溪水社、1996. 8）の第三章「国語科で育てる学力」による。なおこの章の冒頭で浜本が「言葉が生まれる場に立ち合わせる国語科教育を創造したいと思う。」と述べている点にも注目したい。
 - 7 『月刊国語教育研究』（2007. 10）による。
 - 8 この点に関して、第6章第1節において「交流作文」という観点から授業の構想を提案する。